

まえがき

● 大変革がはじまった

2017年3月に新学習指導要領の告示が発表されました。なかでも新学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」は、新学習指導要領の審議の過程で「アクティブ・ラーニング」という言葉として打ち出された、今回の教育改革の大きなポイントです。この「アクティブ・ラーニング」という言葉は、ここ1～2年で急激に広がりました。

その広がり方は「言語活動の充実」のときとはまったく違います。たとえば、言語活動の充実のときは、「ま、話し合い活動を増やせばいいのね。じゃあ、大丈夫」という雰囲気がありました。しかし、今回は前回とは違います。新学習指導要領の告示の出る数年も前から、学び方が変わることが大きな話題になりました。「何を学ぶか」ではなく、「どう学ぶか」が注目されるようになったのです。

一方で、地方の教育委員会のなかには、新学習指導要領の告示が発表されたあとでさえ「アクティブ・ラーニングは今までの実践の延長上にあります（つまり、少しやればいい）」と言ったり、はては「アクティブ・ラーニングは既に我々のやっている実践です（つまり、何もしなくてもいい）」と言ったりしています。「言語活動の充実」が学習指導要領に謳われたときには「言語活動の充実は今までの実践の延長上にあります」と言ったり、はては「言語活動の充実は既に我々のやっている実践です」と言ったりはしなかったと思います。「言語活動を充実しましょう」と指導していたはずです。なぜ、今回は違うのでしょうか？

怖いのです。今回のアクティブ・ラーニングはその程度では済まない

ことを地方の教育委員会も感じているからです。

日本の学校教育は今までに二度、大きな変革がありました。

第一は、近代学校教育制度が成立した明治の初めです。第二は、終戦直後、戦後教育の誕生です。そして今回は、その二つに匹敵するほどの大きな改革になります。今までの「総合的な学習の時間」の導入、「言語活動の充実」、また、「道徳の教科化」とはレベルの違う改革です。

それは近代学校教育制度が成立した根幹を根本的に変える大改革なのです。

● あなたがキーパーソン

本書を手に取っている方は、そのようなことを感じられるアンテナを持っている方だと思います。そして、アクティブ・ラーニングの本や雑誌を読み、対応すべきであることを理解している方です。

しかし、アクティブ・ラーニングに対応できそうな単元は思いつくが、逆に、アクティブ・ラーニングでどのように指導したらよいかイメージができない単元もあると思います。1年間の指導をバランスよくトータルにアクティブ・ラーニングで指導するには、さまざまな単元、場面での指導の実際を知る必要があります。

本書はそうしたあなたのための本です。

本書ではアクティブ・ラーニングで国語の教科指導をしている高校の先生方の実践のノウハウを紹介しております。ぜひ、参考にしてください。使えるならば、そのまま使ってください。どうぞ。

しかし、アクティブ・ラーニングは実は自由度の高いものです。本書を通してさまざまな実践を知ることによって、「あなた」独自のものを生み出してください。本書はそのきっかけになると思います。

さあ、はじめましょう！

上越教育大学教職大学院教授

西川 純

CONTENTS

まえがき 2

一斉授業とアクティブ・ラーニングの違いって？ 4

アクティブ・ラーニングの授業を見てみよう！ 5

CHAPTER

1

アクティブ・ラーニングの授業って どんなもの？

- 1 アクティブ・ラーニングはいまなぜ必要か？ 14
- 2 入試のためにもアクティブ・ラーニングは必要になる！ 16
- 3 即戦力を育てる授業とはどんな授業であるべきか？ 18
- 4 アクティブ・ラーニングの授業イメージ 20
- 5 アクティブ・ラーニングの実際の授業を見てみよう！ 22
- 6 アクティブ・ラーニングへの生徒の感想 26
- 7 アクティブ・ラーニングへの先生の感想 30

COLUMN 実践事例

アクティブ・ラーニングの成果と波及効果 32

COLUMN 『学び合い』によるアクティブ・ラーニングの「学校観」と「子ども観」 34

- 1 教えない代わりに教員がやること 36
- 2 アクティブ・ラーニングで獲得される能力 38
- 3 アクティブ・ラーニング開始宣言 40
- 4 授業のスタート 42
- 5 環境整備① 授業中に教員がやること 44
- 6 環境整備② 立ち歩きのススメ 46
- 7 環境整備③ 生徒の状況を可視化しよう 48
- 8 望ましくない動きが見られたら 50
- 9 授業の終わり方 52
- 10 単元を任せると余裕が生まれる 54
- 11 提出物をチェックする 56
- 12 次の課題を調整しよう 58

COLUMN 実践事例

アクティブ・ラーニングで生徒は伸びる 60

COLUMN アクティブ・ラーニングはなんでもアリではない 62

- 1 単元の学習目標を考えよう① 64
- 2 単元の学習目標を考えよう② 66
- 3 毎時の課題をつくろう 68
- 4 課題事例① 意味調べ 70
- 5 課題事例② 段落分け 72
- 6 課題事例③ 古典の知識 74
- 7 課題事例④ 古典の内容理解 76
- 8 課題事例⑤ 評論の内容理解 その1 78
- 9 課題事例⑥ 評論の内容理解 その2 80
- 10 課題事例⑦ 小説の内容理解 その1 82
- 11 課題事例⑧ 小説の内容理解 その2 84
- 12 評価基準をつくろう 86
- 13 評価方法の実例 90

COLUMN 実践事例

学校だからできること——生徒も教師も授業が楽しくなる 92

COLUMN これからの教師の職能とは何か？ 96

困ったときにはどうすればいい？ アクティブ・ラーニング Q&A

- Q 1** 個別指導はしてもいいの？ 98
- Q 2** 全員達成が語れないときは？ 100
- Q 3** 理想ばかりを追うと失敗する 102
- Q 4** ノートは取らなくていいの？ 104
- Q 5** まとめはしなくていいの？ 108
- Q 6** 生徒だけで深い読みになるの？ 110
- Q 7** クラスによって差が出てきたら？ 112

COLUMN 実践事例

連続した授業のなかでアクティブ・ラーニングを展開した事例 114

COLUMN 評価はどうすればいいのか 118

読書ガイド 119

STEP 2 : 入試のためにもアクティブ・ラーニングは必要になる！



＼ 入試と連動しているから避けられない /

文部科学省は今回の「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」について、大学入試を変えることによって徹底するという、今までやったことのないことをやろうとしています。『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）』では以下のように書かれています。

18歳頃における一度限りの一斉受験という特殊な行事が、長い人生航路における最大の分岐点であり目標であるとする、我が国の社会全体に深く根を張った従来型の「大学入試」や、その背景にある、画一的な一斉試験で正答に関する知識の再生を一点刻みに問い合わせ、その結果の点数のみに依拠した選抜を行うことが公平であるとする、「公平性」の観念という枠組^{しきく}は断ち切らなければならない。（中略）

「1点刻み」の客觀性にとらわれた評価から脱し、各大学の個別選抜における多様な評価方法の導入を促進する観点から、大学及び大学入試希望者に対して、段階別表示による成績提供を行う。

スト（仮称）」が導入されます。正解のない質問に論理立てて答えるという、詰め込み型教育だけでは答えられないテストにしていく方針が打ち出されています。

さらに、テストの点数の扱い方が違います。今までのセンター試験では「1点刻み」の結果が受験校に行きます。1点刻みであれば、同一点数の受験者は多くはなく、ある点数以上を全員合格にできます。

しかし、段階別表示となれば、仮に10点刻みにすれば、その段階の受験者は単純計算で10倍、合否ラインの段階ではさらに膨大になるはずです。とすれば、合否ラインの段階の受験者を全員合格させれば定員大幅超過、逆に全部不合格にすれば大幅定員割れとなり、結果として新テストは足切りには使えますが、それだけで合否を決められません。

そこで答申では、各大学で独自の入試ポリシーを決めて、それと対応する試験をすることを求めています。その方法は「小論文、面接、集団討論、プレゼンテーション、調査書、活動報告書、大学入学希望理由書や学修計画書、資格・検定試験などの成績、各種大会等での活動や顕彰の記録、その他受験者のこれまでの努力を証明する資料などを活用する」と書かれています。つまり、これが合否を定めるのです。

さらに答申では「『人が人を選ぶ』個別選抜」の確立を謳っています。これから入試は1点刻みでの選抜ではなく、一定の成績の膨大な人数から、より「思考力・判断力・表現力」をアクティブ・ラーニングで鍛えてきた人が選ばれるようになるのです。

（西川純）

＼ 「1点刻み」を明確に否定し、「人が人を選ぶ」個別選抜へ /

答申によれば、センター試験の廃止後、「大学入学希望者学力評価テ

1 教えない代わりに 教員がやること



\ 授業の主役は生徒です /

これまでの授業は、教員による「説明」「発問」「指示」でほとんどの時間を使っていました。「発問」をして生徒に考えさせたり、「指示」をして生徒に何らかの作業をさせたりする時間ががあればいいほうで、50分の授業がほぼ「説明」だけだったということも珍しくありません。

しかし、アクティブ・ラーニングの授業では、生徒の学習活動が授業時間のほとんどを占めることになります。教員の説明は最低限になります。生徒が慣れてくると、説明の時間はゼロ分という日もあるくらいです。

考えてみれば、これが授業の本来の姿なのかもしれません。教職課程の授業で、あるいは教育委員会等の研修で、こんな言葉を聞いたことはありませんか。「授業の主役は生徒なのだ」と。主役といえば、映画でもドラマでも、画面に映っている時間は一番長いはずです。しかし、実際の授業はそうなっているでしょうか。**本当に生徒が主役なのであれば、生徒の活動する時間が一番長くなるはずです。**

\ 教員と生徒の役割分担 /

教員はいわば脇役に徹することになりますが、脇役には脇役にしかできない役割があります。主役が引き立つためには、脇役がいい仕事をしなければなりません。それは、「目標設定」「環境整備」「評価」の3点

です。詳細は次項以降で詳しく解説するので、ここでは概要を見ておきましょう。

○目標設定

生徒は（正確に言えば「人は」）もともと学ぶ力を持っています。自分の目で見るまでは信じがたいかもしれません、感覚さえつかめば生徒は放っておいてもどんどん学んでいきます。しかし、何を学べばよいかを知っているわけではありません。そこで、教員が単元目標を設定し、「その単元で何を学習するのか」ということを伝える必要があります。

○環境整備

乱暴な言い方になりますが、生徒はさまざまな制約の下にいます。決められた座席で、決められた教科書で、決められた時間で勉強しなければなりません。そこで、生徒が活動しやすい環境を整備しましょう。そうすることで、アクティブ・ラーニングは促進されます。具体的にどうすることが環境整備に当たるのか、次項以降の解説をお読みください。

○評価

指導要録のために評定をつけるという意味での評価はもちろんですが、それ以上に大切なことがあります。それは、生徒たちの学習状況を見取り、適切にフィードバックすることです。評価とは、単に点数をつけることではありません。彼らの良いところ、直すとさらに良くなるところをしっかりと伝えてあげましょう。どのような観点で生徒を見ればよいのか、コツさえつかめれば日常での生徒理解もぐっと深まります。

(今井清光)

連続した授業のなかで アクティブ・ラーニングを 展開した事例

今日の課題はこれ！『夢十夜』の実践

授業の開始とともに、それぞれの4人グループで『夢十夜』の第一夜の音読を開始。読み方を確認しながら、順番に読んでいきます。

読む順番などは自由。自分たちで決めた順番、範囲で音読します。

「ジャンケンしよう」

「じゃあ時計回りね」

順番が決まるとき音読の開始。

教員は、このとき課題を黒板に板書しておきます。

読み終わったら感想のシェア

読み終わったら一言で感想を言い合います。

「わかんない」

「なんか、おもしろいね」

「え？ 何が言いたいの？」

一言感想だとあまり深い内容を発言し合うことはありません。ただ、読後の最初に自分はどう思ったのかを大切にします。

「わからない」を大切にする

『夢十夜』の第一夜は非常に抽象度の高い幻想的な作品です。最初の疑問が、このあとの授業の課題になります。

課題：深い意味がありそうな言葉、考えてみたい言葉を本文中から
いくつか挙げてみよう。

この合図と同時に、生徒たちはもう一度最初から印を付けながら默読していきます。いろんな疑問をそのつど本文に書き込んでいくように指示を出してもいいでしょう。疑問を書き出せるようにワークシートを用意してもいいですね。

課題をつくるのも生徒

課題については、もちろん教員側がつくるのでもかまいませんが、課題はなるべく生徒が決めてほしいと思っています。なぜなら、こちらの用意した課題は、与えられた課題であるからです。与えられた課題を解決できる力も大切ですが、自分で発見した課題も解決できたらいいなと思います。またほかの仲間がどんな疑問を持ったのかを知ることで、疑問の持ち方を学んでいくことができます。

課題を共有する

次の時間に生徒から挙がってきた疑問をまとめ、以下の課題をつくりました。

二つの課題を踏まえた上で、小説の主題をグループで話し合いま
とめる。

課題①：次の語について、担当者を決め隠された意味を探る。

a 白い百合 b 露 c 暁の星

d 真珠貝と月の光 e 百年

課題②：二人は再会したのかどうかを、根拠とともに説明する。

さらに、この話の主題について考える。

課題①が5項目だったので、5人グループで実施。それが一つの項目を担当するようにグループ分けを指示します。